

CONSTRUCTIVIST LEARNING DESIGN

構成主義的な 学びのデザイン

G.W. ギャニオン、M. コレイ

菅原 良 [監訳] 太田 和寿 [編集] 福田 志保 [編集]

Key Questions for Teaching to Standards

George W. Gagnon and Michelle Collay

CORWIN PRESS, INC.

目次

監訳者まえがき	5
はじめに	8
はしがき	13
なぜこの本を書いたのか	16
構成主義的な学びのデザインの変遷	20
生徒の関心事と基準との真の結びつき	21
構成主義的な学びのデザインの狙い	25
本書が対象とする読者	26
本書の構成	27
謝辞	28
著者略歴	31
イントロダクション～学びのデザイン～	32
シチュエーションセクション：構成主義的な学びのデザイン	34
グループセクション：学びにおいて留意しなければならないこと	41
ブリッジセクション：学びとは何か？	44
タスクセクション：学びの特徴	46
エグジビットセクション：お伽話に見る学びのエピソード	52
リフレクションセクション：構成主義的な学びのデザインの先例	54
まとめ：私たちの視座は？	61
1章 シチュエーションのデザイン	65
シチュエーションセクション：手引きとなる質問の明示	67
グループセクション：CLDの共同構築	72
ブリッジセクション：シチュエーション分析に役立つ質問	77
タスクセクション：シチュエーションエレメントの修正	79
エグジビットセクション：シチュエーションエレメントの実例	85
リフレクションセクション：シチュエーションエレメントの先行理論	90
まとめ：シチュエーションデザインについて考慮すること	98

2章 グループの組織化.....103

シチュエーションセクション：グループの決定.....	106
グループセクション：共同思考の力.....	116
ブリッジセクション：グループを編成するための質問.....	122
タスクセクション：グループエレメントの修正.....	122
エグジビットセクション：グループエレメントの実例.....	135
リフレクションセクション：グループエレメントの先行理論.....	136
まとめ：グループ編成について考慮すること.....	145

3章 ブリッジを架ける.....147

シチュエーションセクション：以前の知識の顕在化.....	149
グループセクション：生徒たちの考えとの関連づけ.....	155
ブリッジセクション：ブリッジ構築のための質問.....	160
タスクセクション：ブリッジエレメントの修正.....	161
エグジビットセクション：ブリッジエレメントの実例.....	168
リフレクションセクション：ブリッジエレメントの先行理論.....	172
まとめ：ブリッジを築くことについて考慮すること.....	177

4章 タスクの作成.....181

シチュエーションセクション：タスクの作成.....	183
グループセクション：共に考え意味を形成する.....	189
ブリッジセクション：タスクを組み立てるための質問.....	193
タスクセクション：タスクエレメントの修正.....	194
エグジビットセクション：タスクエレメントの実例.....	200
リフレクションセクション：タスクエレメントの先行理論.....	207
まとめ：タスクを築くことについて考慮すること.....	210

5章 エグジビットの準備.....213

シチュエーションセクション：発表形式の決定.....	214
グループセクション：生徒が自分の考えを発表する力.....	220
ブリッジセクション：発表意欲を高める質問.....	224
タスクセクション：エグジビット要素の修正.....	225
エグジビットセクション：エグジビット要素の実例.....	232
リフレクションセクション：エグジビット要素の先行理論.....	235
まとめ：エグジビットを築くことについて考慮すること.....	241

6章 リフレクションを誘導する.....243

シチュエーションセクション：思考のリフレクションを誘導する.....	244
グループセクション：意味構築におけるリフレクション.....	248
ブリッジセクション：リフレクションの手引きに関する質問.....	252
タスクセクション：リフレクション要素の修正.....	253
エグジビットセクション：リフレクション要素の実例.....	262
リフレクションセクション：リフレクション要素に先行する理論.....	265
まとめ：リフレクションを築くことについて考慮すること.....	271

7章 デザインを教える.....273

デザインをダンスする.....	274
歩調合わせ，リズム，フットワーク.....	275
ダンスのための音楽を選ぶ.....	278
ダンスをリハーサルする.....	279
3人のダンサーの物語.....	285
一緒に踊ること.....	288
運営管理者をダンスに招待すること.....	291
他の人たちをダンスに招待すること.....	292
資料.....	295
文献.....	322

監訳者まえがき

本書の原題は“CONSTRUCTIVIST LEARNING DESIGN”です。直訳すると『構成主義者の習得デザイン』とでもなるのですが、何とも分かり難いというのが第一印象でした。そもそも、構成主義者なんて表題を付けようものなら、何とも怪しい主張の持ち主のための本、なんて思われかねませんが、教育学の分野では、行動主義や認知主義と並ぶちゃんとした先人の知恵から受け継がれた研究の立ち位置なのです。ですから、本書は決して怪しげな本ではなく、大真面目に教育の方法論を論じた研究書であることをお断りいたします。

次に私がこだわったのは、“LEARNING”をどう訳すかという点でした。何も考えずに訳してしまうと、「習得」となるのではないかと思います。習得という言葉には「ならっておぼえること」という意味があります。つまり、誰かから受動的に「まなばされる」というニュアンスが強く聞こえてしまい、本書の内容とは少し離れると考えました。そこで、学習者が能動的に「学ぶ」ということを少し強めに主張したかったために「学び」と訳しました。それに加えて、「習得」というといかにもやらされている感いっぱいのように思えてしまい、あまり嬉しいものではありません。そういう意味からも、学習者が主体的に「学ぶ」こと、つまり「学び」としたというわけです。

翻って、本書が出版に至るまでの経緯について書かせていただきます。翻訳を企画したのは、2010年秋のことでした。今でこそ「アクティブラーニング」とか、「問題解決型学習（PBL）」といった学びの方法が注目され、多くの学会でいくつもの研究論文や発表が行われておりますが、わずか数年前にはこのような学びの方法を実践されているということを耳にする機会はほとんどありませんでした。

私の専門は教育工学なのですが、私が実現したいと常に思っているの

は、学習者が自らアクセスして使ってしまうようなラーニングシステムの開発をしたいということです。そう、少し前ならば Nintendo DS や Wii、今ならソーシャルゲームのような、つい引き込まれて時間を忘れて没頭してしまうようなラーニングシステムを開発したいと思っているのです。キーワードは、学習者の「自発性」といったところでしょうか。私は、これを実現する思想が構成主義だと考えています。

この時から、構成主義に関する本を探し回ったのですが、日本語で体系的に書かれた本はないのではないかという結論に至りました。本書は、このような問題意識が出发点となって出版に至ったものなのです。

本書は『構成主義的な学びのデザイン』と銘打ってはおりますが、教育に携わるすべてのひとに読んでいただきたいと願っております。きっと、「学び」とは何か、といったことが見えてくるのではないかと思います。断片的であるにせよ、「学び」に関する科学的な視点に立った知見を知ることができるのではないのでしょうか。

本書を出版するにあたっては、たくさんの方々にお世話になりました。本書の出版を考えたときに、最初にご相談させていただきましたのが、いままで何度もお仕事をご一緒させていただいておりました柳澤奈津子氏でした。柳澤氏が主宰する翻訳事務所より提供していただく翻訳は、ひじょうに翻訳水準が高く、いつも安心してお仕事をお願いすることができます。本書は、柳澤氏よりご紹介いただいた新進気鋭の翻訳者の皆さん、私の学者仲間と一緒に作り上げたものです。この場をお借りして心より感謝と御礼を申し上げます。

また、青山ライフ出版の高橋範夫社長からは、的確かつ親切丁寧なコメントと、綿密で迅速なご支援をいただきました。高橋社長からのサポートなしには、本書を世に出すことはできませんでした。心より感謝と御礼を申し上げます。

最後に、連夜に亘る深夜までの監訳作業につきあってくれた妻典子と沙恵・唯のふたりの子供たちに心より感謝します。

2015年4月吉日

菅原良

※本書では、全体を通して Situation Section, Group Section, Bridge Section, Task Section, Exhibit Section, Reflection Section という6つのセクションがでています。これらを日本語に訳すべきか悩んだのですが、どうしても日本語に置き換えると原意がうまく伝わらない語があることから、あえてカタカナとさせていただきます。

はじめに

来るか、来ないか、仲間入り？

— Lewis Carroll,
Alice's Adventures in Wonderland

この小さくて貴重な本は、影響力と将来性を兼ね備えている。控えめに、狙いを定め、簡潔に、教師が指導・学習をどう考えるべきか、緩やかな調子で変革案を推し進める点で、小さくて貴重である。一方、何百もの独創的なストラテジーを用いて、四半世紀の間、教育界のパラダイムシフトを引き起こす一助となってきた点では、影響力、将来性を備えた本とも言える。この本のおかげで教える側の行動主義に触発された全知的な指導から、生徒側の積極的な内的動機に基づいた学びへとパラダイムシフトが引き起こされてきた。

数学教師のジョージ・ギャニオン (George Gagnon) と音楽教師のミシェル・コレイ (Michelle Collay) は、共に経験豊かなスクールコンサルタントであると同時に教師の中の教師であり、さらには互いにそれ以上の関係も築いている。家庭では仲の良い夫婦で、二人の子供、ボンとニーナの面倒見の良い誠実な両親として、当然のことではあるが、子供たちが健全に効果的に学ぶことのできる学校環境を享受しているか気にかけている。才能ある数学と音楽のプロ教師として持ちつ持たれつ関係を築く二人は、例えるなら、学習指導の創造的計画と実践において振付師とダンサーの役割を果たしていると言えるだろう。

バレエの一作品のように綺麗にまとめられたこの本は、時宜を得た教育基盤強化を行うために、M&M チョコレートを褒美として段階的に配ったり、横並びに一斉にストップウォッチを利用したりすることについて述べているのではない。そうしたことは、ディレクト・インストラクション (direct instruction)、教師による管理、生徒が持つ付帯的な動機などが繰り返される劇場で見られることだろう。否、この楽譜に

対しては、拍手も舌打ちも不満の声も聞こえてはこないし、スキナー (Skinner) の弟子たちが発する肯定の言葉もほとんど耳に届かない。パウロ・フレイレ (Paulo Freire) は、生徒を教師が与えた知識を貯蔵する銀行の金庫室になぞらえたが (1970)、ギャニオン (Gagnon) とコレイ (Collay) は、そうした生徒像を喚起することも求めない。否、本書が語るのは、互いに支えあって学びを深めるために全ての生徒が共にダンスするように励ます方法である。

本書は、新人教師にもベテラン教師にも教育系の大学で教師を育成する教育専門家にも、教職に就く前の訓練を積んでいる学生にも読んでいただきたい。また、教師の監督や関係スタッフの育成について洞察を深めるため、学校経営者にも手に取っていただきたいし、ディレクト・インストラクションの代替法を求めようとしている偏見にとらわれない行動主義者にもお薦めする。学生が向上心を保てるような教鞭方法を身に着けたいと考えるリベラル・アーツ系大学の教授にも薦めたい本であるし、学校に通う子供を持つ親にもホームスクーリングで学習中の子供を持つ親にも読んでいただきたい。そういう意味では、正規教育に関係する全ての人にこの本を手にしていただきたい。もちろん、単に権威主義的なディレクト・インストラクションの手法だけを探求するファウスト的契約を結んでいないことが条件である。

本書は、構成主義的な学びのデザイン (Constructivist Learning Design) をテーマとしており、ギャニオン (Gagnon) とコレイ (Collay) の基本的な考え方をまとめた一冊である。構成主義者の議論は、知識を個人的、そして、社会的に構築することで人間は成長するという点を明確な前提にしている。私たち人間は、自分自身で個人的な意味を生み出し、他者とは共有可能な意味を創り出す。つまり、人間は知識を構築するのであり、理解しやすいよう工夫されて教えてもらった概念を受け入れ習得するために、その場で反応したり自分の心象地図や、それ以前の経験に関連付けたりするのである。学校教育が主に目指すべきは、学び

を通して生徒を成長・向上させることで、指導というのは学びを支える一つの方法でしかなく、因って、補助的な意味でのみ重要なのである。ギャニオン (Gagnon) とコレイ (Collay) は、教師は学びの舞台で賢者になろうとするより、傍の案内者でいるほうが良いと指摘する。共に学びを深める教え子とその師のダンスに作曲家や編曲者が曲をつけるように、二人は自分たちのデザインで教育活動を淀みなく遂行するための全体構造や枠組み、幕の上がる順序や全般的な表現形式を示している。ひと言で言えば、構成主義的な学びのデザインを通じて、生徒の学びに役立つクラス運営がどうあるべきか、構成主義的な見解を教師に提示しようとしているのである。

構成主義的な学びのデザインは、「シチュエーション (situation)」「グループ (groups)」「ブリッジ (bridge)」「タスク (task)」「エグジビット (exhibit)」「リフレクション (reflection)」の六つの構成要素からなり、教室という学びの場で実際に利用される際には、六つの順序は流動的となる。

1. 「シチュエーション (situation)」では、目標、タスク、そしてギャニオン (Gagnon) とコレイ (Collay) が学びのエピソードと呼ぶものの形式を詳しく説明し、生徒の学びへの参加計画の枠組み作りをする。
2. 「グループ (groups)」は、生徒同士が意思疎通を図ることのできる機会を生み出し、タスクや学びのエピソードの形式に関わる中で彼らをまとめる社会構造のことである。
3. 「ブリッジ (bridge)」は、生徒が新しい事柄を学ぶ以前から持っている知識を明るみに出すことを指す。構成主義的な教育の核心となるもので、これにより、生徒は新しい学びの内容をそれぞれの認知地図、価値観、態度、期待感や運動能力に照らし、新出内容に焦点を合わせ直して学びを進めることができる。
4. 「タスク (task)」は、学びの目的を明らかにしたり、信憑性を評価